
歌姫は40歳

甘味園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌姫は40歳

【Nコード】

N3839B

【作者名】

甘味園

【あらすじ】

アマチュアボーカリストあけみは40歳。バツ二子持ち。野望を持って歌い続けている。男運が悪く、出会った男はあきれた奴ばかり。果たしてあけみは、ビッグなボーカリストになる。パーフェクトな彼氏をゲットする。この二つの夢をかなえることができるのか？

その一 ハードロックは辛くない？

「お疲れ様です！」

金髪のロングヘアにサングラス。つばの小さいベレー帽。

真っ赤なミニスカートにレンガ色のロングブーツ。

靴や衣装、そしてゴールドのマイマイクがはいった大きなばんを
持って

ライブハウスの機材搬入口から中にはいる。

もう何回も何十回も、いや、何百回もやってきたこと。

あけみの自慢は、20代から変わらないBWHのスリーサイズ。

40でミニスカートが着こなせる体型は自慢だ。

サイズは変わらなくても張りとかつやが微妙に変わった気もするけど
目をつぶる。

2

今日のライブハウスは地元では有名なハードロック&ヘビーメタル
系のハコ。

ライブハウスをハコというのはミュージシャンだけなのかな？

なにしろ幕が下りる代わりに分厚いシャッターが下りる。

昔メタルのライブで興奮した客がステージにビール瓶なんかを投げ
つけたから、

そんな危険からミュージシャンを守るため、
危ないことがあったらいつでも下ろせるようにシャッターをつけた
って話。

しかしね、シャッターが完全に開くまでに一分ってどうよ。
中途半端にステージが見える時間としてはかなり長い。

しよっぱなで客の気持ちをつかみたいし、
このシャッターが開いていく一分はすごい大事。

今日歌うバンドはレギュラーで毎週リハしてるバンドじゃなくて
ライブ前にあわてて一度合わせただけのセッションバンドだから
シャッター開いてる間どうするか決めてなかった。

あのリーダーやってるベーシスト、オープニングのサウンドエフェ
クトなんて

つくってくれてないだろうなあ。

曲の前奏をギタリストが長々とソロっぽく引き続けるのかなあ。

ベーシストは長身。やせて無口で、結構タイプ。

ギタリストはかわいい系だな。もうちょっと若かったらジャニーズ
でもいけるかも。

ま、どっちも私の半分くらいの年だけだね。

その一 ハードロックは辛くない？（２）

と思いつつあけみはベーシストとギタリストを探したけどまだいないみたい。

ドラマーは目立たなくて印象うすくてあけみはどんな子が思い出せない。

ギタリストと仲良しっていいのは聞いてたけど。だけどとにかく知ってる顔がどこにもない。

うろろろしてるのは対バンミュージシャンらしきハイテンションのグループ。

ライブ前のライブハウスの空気って好き。

大勢の男たちが真剣な感じで

機材を運びこみ、ライトや音をチェックし、

「現場」って感じがする。

「お疲れっす」

さんざんぼーっと男たちの様子を眺めていたらベースのアキラが現れた。

しかしほんとに細いね。何食べてるんだらう？そして今日も黒づくめ。

黒いＴシャツに黒い長袖シャツ。黒のコットンパンツに黒い帽子。スタジオにはかりいて日にあたっていないのか顔だけが青白く、目ばかり大きい。

あけみが彼のベースを初めて聞いたのは最近だけど即座に気に入ってしまった。

なんていうか・・・スティック。

「アツキヨは？」

と聞くあけみにアキラはかぶりをふる。

なんでも小学校時代からバンド組んでたっていう

ドラマーアツシとギターのキヨシはいつもつるんでる。

あんまりつるんでるからいつもまとめて「アツキヨ」って呼ばれてるらしい。

なんかどっかのドラッグストアみたいな名前だけだね。

「アツキヨ遅いね。」

今日の服装に全く似合わないゴツツイ男物の腕時計をちらっと見ながら

あけみはため息をついた。

本当はリハの回数少なかったから少し早めにはいって打ち合わせしようって言うてたのに。

イベンターがもう出演者を集め始めてる。

もうちょっとでリハーサル始まりそう。

アキラは何も言わない。

そっぽ向いてタバコ吸ってるだけ。

リハは逆リハで出番の遅い順。

あけみたちは今日出演の三バンドのうち最後に演奏するトリだから本当は一番にリハしなきゃいけないんだけど・・・。

「ローリングスミスさん！」

イベンターが呼んでいる。

ローリングスミスってどうよ？とあけみは思っている。

ローリングストーンズとエアロスミスのカバーを演奏するために今回限りで作られたユニット。

そのボーカルを女性ながら頼まれたのはあけみとしては光栄だけど

けど、合わせてローリングスミスってさあ・・・。

まあいいけど。どうせ今日かぎりだし。

アキラはちょっと舌うちしてたばこをもみ消すと、
まだメンバーが揃ってない事をイベントに告げにいった。
アキラって動きもきれい。流れるように歩く。

結局アツキヨが全く悪びれずにニコニコ登場したのは
ライブ開場の15分前。

アツシは本当にどこにでもいそうな顔のうすーい子。
これじゃ覚えてるわけないか。とメンクイのあけみは心の中で苦笑
した。

時間ギリギリだけど、
イベントーに無理言ってちょっとだけリハさせてもらうことは
できない時間じゃなかった。

「ふたりともきのうバイトで夜遅くて〜。」と言いつつふたりに
アキラは冷たく

「リハしないから。」と一言。

その一 ハードロックは辛くない？（3）

なんとなく、暗く重い雰囲気包まれたあけみたち。
リハできないのはキツイけど、リーダーはアキラだし、
はつきり言ってもう時間もほとんどない。

アキラは下を向いてたあけみを振り返ると

「アケさん、すみません。」と

頭を下げた。

なんと言ってもアキラがリーダーなんだし

あけみは今回、頼まれて歌ってる立場だから。

そんなちゃんとした対応のできる男だと思ってなかったあけみは
ドキドキしてどぎまぎしてしまった。

「あ、ど、どうも……。」

あけみは、ふだんのテンションとステージ上とがまるで違うので有
名なボーカル。

ステージに上がれば客を乗せるしはじけるけど、

ふだんはおとなしくて黙ってる。っていうよりぼーっとしてるって
いうか……。

アツキヨは、アキラが思いのほか厳しい感じだったので
めずらしく神妙にしている。

もうすぐ開場とは言え

あけみたちローリングスミスの出番まではまだあと二時間近くある。
出番前のミュージシャンの時間の使い方はさまざま。

客席で談笑したり、タイバンのライブ聴いてリラックスするタイプ、

ひとり孤独にタバコ吸って考え事するタイプ、
メンバー同士でいろいろ確認したがるタイプ、
演奏曲をヘッドホンで聞きまくることで安心するタイプ、
楽屋のすみでなんとなく練習するタイプ。

あけみは、出番まえにジタバタするのはあんまり好きじゃない。
今回はサポートだから自分であんまり集客もしなかったし。
ま、ひとりでばーっとするか。と思つて
一旦ライブハウスを出た。
外にはそろそろお客さんたちがたむろしはじめている。
知ってる顔はないから駅前のドトールにでもいくかと
足早に歩き始めたところを呼び止められた。

「オフクロ！」

一瞬身体が凍りつく。

あけみ、あわてて走って戻る。

「ライブ会場でオフクロって言わないでって言ったでしょう！」

と、声の主18歳男子の袖をつかみあわてて走る。

「そんな走つてももう無駄じゃん?!」

と余裕の18歳男子。

この男子が何を隠そうあけみのひとり息子。

22歳の時、二回目の結婚でできた子供だ。

ちなみに一回目の結婚は16歳のとき。4ヶ月しかもたなかったけど。

二回目は結構いい線いってたのだ。

できちゃった婚だったけど夫はイケメンだったし
生まれた息子もイケメンだし。

だけど夫はものすごく嫉妬深くて
あけみが他の男と喋るだけでも嫌だからって

バンド活動を強制的にやめさせられた。

いいや。もうバンドは。

私は愛に生きるのよ。

と一時は思ったあけみだったけど

無理だった。

そのうち喧嘩になって夫が暴れだして
気が付いたら夫にはほかの女がいた。

その一 ハードロックは辛くない？（４）

「オフクロって言わなきゃ、あんたは私の年下彼氏に見えるんだから。」

と古臭い喫茶店にはいったあけみは椅子に座りながら言った。

息子太郎は真顔で

「いや、見えないと思う。」

「なら、なにに見えるっていつのよ？」

あけみはイライラしてきた。

「息子。隠さなくたっていいでしょう。」

「だめなの！イメージってあるんだから！」

「そりゃね、オフクロがもう少し若ければイメージにしたほうがいいと思うけど、40にもなったらもういいんじゃないの？」

全く本当にくたらしい奴。

と思いながら、あけみはため息をついた。

とつさに太郎をひっぱって喫茶店にはいつてしまったけれどふたりで特にやることもないし・・・。

話題もないし。

あけみは昼間はテレフォンオペレーターをして働いてるし夜はスタジオにすることが多い。

大学生になったばかりの太郎もコンビニでバイト始めたし、やっぱり忙しい。

ふたりで家でゆっくりすごすことなんかないから、全然共通の話題がなかった。

太郎は小さいときからほったらかされて大きくなったからすごくしっかりしてる。

少なくとも母親よりもずつとね。

ちよつとすっぱいコーヒーをふたりで黙って飲んでいると
あけみの携帯が震えた。

電話。鉄からだ。

なんだろうこんな時間に？きょうはライブだって言っているのに。
たまには彼氏らしいことする気かな。

ライブききにくるって言うのかな？

「はい。」

「あけみ？いまどこ？」

「スコールライブハウスのそばだよ。もうすぐライブだもん。」

「あ、そっか。じゃ、いいや。」

「じゃ、いいやってなによ？」

「俺さあ、いまガソリンいれようと思ってスタンドに来ただけで、
ガソリンいれてから金持っていないことに気が付いちゃってさあ。」

「は？」

「でもライブ前じゃね、いいよ。」

とは言ってるけど、鉄はここであけみがあ、そう。バイバイと電話
を切れる女じゃないことを知っているのだ。

舌打ちしたい気持ちになりながらあけみは

「なに？どこにいるの？」

「xx駅の裏のスタンドなんだけど。遠いからこれないよな。」
そんなふうに言われると、なんとしてでも言ってあげたくなるのが

あけみの悪いところ。

「わかった。じゃあちよつと待ってて。いまいくから。」

「え、でもスコールの駅からじゃ30分くらいかかるぜ。」

そんなことはわかってるわい。

さっさと電話を切ってあけみは伝票をつかんだ。

「ごめん、ママちよつと出かけなきゃ。」

「またあいつの呼び出し？いい加減にしたほうが良くない？」

太郎の言つとおり！と思つたけど、自分でもどうしようもないあけ
みなのだ。

「うん。今日だけ。もう行かないよ。」

「っていうか、オフクロ、出番に間に合うの？」

「当たり前じゃん。大丈夫。客席で待ってて。」

心配そうな太郎を残してあけみは駅まで走った。

出番まではあと一時間半。

往復一時間で行つて来られるんだから大丈夫。

駅についたらちょうど電車がすべりこんできた。

あけみは10歳年下の彼氏のガソリン代を払いにいくために
電車で飛び乗った。

その一 ハードロックは辛い？ (5)

電車の中であけみはぼーっと窓の外を見ていた。時間的には余裕で間に合うはず。

鉄は困ってるんだし、私が行ってあげなくちゃ。

という思いと同時に、

ライブ直前のボーカリストがなにやってるんだろっ？って自分で自分にあきれてもいる。

今日歌うのは過去に何度も歌ってる曲ばかりだし、歌詞も全部はいつてるからいいよね。

いまは何も考えずにぼーっとしたほうがいいよね。もう来ちゃったんだし。

それに鉄の顔見たら私元気になるかもしれないし。

あけみの携帯がまた震えてる。

着信。ベースのアキラだ。

電車の中なので周りに遠慮しながらとりあえず電話にでる。

「あけさんいまどこですか？」

いきなり言われてくちこもるあけみ。

「うん。ちよつと電車の中・・・。」

「え？なんで？」

「ごめん。ちよつと用事で。でもライブまでにちゃんと戻るから大丈夫。」

「そうですか。オープニングのとき打ち合わせしたかったんですけど、じゃあこっちでやっときます。」

口調は丁寧だがあきれてる感じのアキラ。

「ごめんなさい！すぐ帰るから。」

車内にパラパラいる乗客がチラチラ見ている視線を痛いほど感じて、

あけみはあわてて電話を切った。

あせってもどうにもなるものではなく、電車は30分きっかりかかって鉄のいる駅に着いた。

あけみはドアが開くと同時にダッシュで階段を駆け上がり、改札を出ると同時に鉄の携帯を鳴らす。

トウルルルトウルルルル．．．．

7回コールしたあたりでひやーとした不安感に襲われたあけみ。

一度電話を切って、もう一度コールしてみる。

7回め、8回め．．．あけみが再びどきどきしてきたところでカチッと電話をとる音がした。

「あ、鉄？駅についたよ。スタンドはどこ？時間がないの！」

あけみは一気に喋った。

「あけちゃん？あー、ありがとうー。嬉しいなあ。」

とのーんびりと話す鉄。なぜか背後がざわついた感じがする。

うん？こいつが、あけみじゃなくてあけちゃんて呼ぶのはお酒飲んだときだけじゃなかったっけ？

「だから、時間がないんだってば。どこのスタンド？」

「スタンド？ああ、スタンドにはいないよ。」

「いるって言ったじゃない！お金ないって。」

「ああ、いたよ。金もないし。」

「は？いた？いまは？」

「駅でて目の前にある焼き鳥やで飲んでるよ。あけちゃんもはやくおいで。」

あけみは目の前が真っ暗になり、思わずしゃがみこみそうになった。やっぱり飲んでるんじゃない！

「車なんですよ。飲んでどうするのよ？」

あけみはちよつと冷たく言ってみた。

「だってあけちゃん来てくれると思ったから。送ってもらえるじゃ

ん。ね！」

と嬉しそうな鉄。

だから、私はいまからライブなんだよ！！と切れそうになりながらも、あけみはとにかく焼き鳥やへ向かった。

駅前ののれんのかかったたきいとは言いがたい焼き鳥や。

外にまで煙がもうもうと出てきている。

あけみがガラッとガラス戸を開けると、カウンターにすわっていた男達が一斉にあけみを見た。店には煙が立ちこめ、焼き鳥のにおいでいっぱいだ。

金髪ミニスカのあけみは入り口に立ち尽くした。

カウンターの男達は酔っ払っているので遠慮なくジロジロとあけみを見る。

「おう、姉ちゃん、ここへ来てすわんなよ。」

中年のおっさんが自分のひざを叩いてにやにやしている。

もう冗談じゃないわよ。私は忙しいんだし、焼き鳥の匂いがついちゃったらどうしてくれるのよ！と思いつながら、鉄を探す。

鉄はカウンターの一番奥でにこにこしていた。

その一 ハードロックは辛くない？（6）

腰まである長い髪。女の子みtainなきれいな顔。素肌に着た青いシャツの前を第三ボタンまであけている。首からはゴールドのチェー
ンネックレス。

おいおい、私がお誕生日にあげたシャツじゃん。シルクで高かったのに、やきとりの匂いついちゃうじゃん。

あけみは、速攻で鉄の前まで行くと、鉄の腕をつかんで立たせた。

「おいおい、姉ちゃん、警察かよ？連行する気かい？」

となりの顔を赤くした中年おやじが絡もうとする。

あけみは思い切りそれを見殺し、鉄の腕をひっぱりレジまで進んだ。鉄も黙っておとなしくついてくる。

あけみの剣幕に圧倒されて、レジのお兄ちゃんが小さい声で

「8500円になります。」

「は？8500円？！」

こんな焼き鳥やでなんでそんな値段……？

「越の寒春を飲まれたものですから。あの、名酒とよばれるお酒でして。それもかなり寝かせたものですから。なにしろ出所はそもそも越後の蔵元で……」

「ああもういい。わかったわ。」

時間もないのであけみは素直に8500円を支払う。全くもう。なんでそんな高い酒飲むのよ。よっぽばらったら味なんかわかんなくなっちゃうくせに……。

「あけちゃん、ありがとう」

と大きな声で叫ぶ鉄。もう、これだから酔っぱらいは嫌いなんだってば！もう黙って欲しい。

あけみはとにかく鉄を店から引つ張りだして、ガラス戸を大きな音

をさせて思い切り締めた。

酔っぱらった鉄をひっぱり、スタンドの位置を聞き出し、スタンドでガソリン代を支払い、とにかく鉄をひっぱりつてゴルフの助手席に乗せる。

「あけちゃん、送ってくれるの？ありがとぅ」

ありがともなにもない。こんなに酔っぱらってて運転できるわけないんだから。

とにかくライブハウスまでこのまま乗ってくしかない。ライブに遅れるわけには絶対にいかない。

あけみはエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

となりの鉄はあつと言う間に眠ってしまった。

まったくさあ、いい気なもんよね。とぶつぶついながらバイパスを走る。

ここを抜ければもうすぐだから、あと10分で着くよね。ライブ15分前には到着できるはず。

とあけみが思った瞬間、前方で車のバックライトが点滅しているのが見えた。

え？渋滞？

仕方なくあけみもブレーキをかける。

どうやら工事中で車線が少なくなつて渋滞しているらしい。

あけみは青くなった。

どうしよう？でも迂回する道はないし、Uターンはできないし、どうもしようがない。

隣では鉄がスヤスヤ眠っている。

ブプー！迷惑は100も承知でクラクションを鳴らしてみる。

シーン。なにも起きない。当然だよなあ。クラクション鳴らせたら動けるくらいならどの車もとくに走ってるはずだもんなあ。と思うが、でも、いてもたってもいられない。

あけみは今度は無意味に車の床を蹴ってみる。
それからハンドルを叩く。
やっぱり前の車は動かない。

どうしよう？どうしよう？どうしよう？

こうしている間にもどんどん時間は過ぎていくのだ。
気がつくにあけみの出番まであと13分に迫っている。

車がとまった頃から携帯は狂ったように鳴り続けていたけど、うるさいから電源を切ってしまった。

しかし、さすがにこれ以上シラバつくれると、もう誰も私と一緒にライブしてくれなくなるかもしれない。やっぱり連絡しなきゃ。とあけみは決心した。

覚悟を決めて携帯に電源をいれるとアキラの携帯を鳴らした。

鳴らした瞬間にアキラが出た。

「あけみさん？ やつと着きました？ 早く、もうステージに上がってください。」

「ごめん！ あの、えっと、ちょっとトラブって・・・」

「え？ なんです？ 良く聞こえないんですけど・・・」

「あのね、もうすぐ着くから。とにかく出番までには行くから。絶対いくから。」

と早口でまくしたて、そのままあけみはまた携帯の電源を切った。

その一 ハードロックは辛い？ (7)

あーあ、もう!!!

あけみはイライラして長い金髪の髪の毛をかきむしった。

どう考えても間に合いそうにない。

ライブ当日にボーカルがバツくれるなんて最低だが……。

あけみの頭の中にはいろんな考えがかけめぐる。

もし私が出番までに戻れなかったら……。

ストーンズとエアロスミスの曲で

いくらなんでもボーカル抜きのインストルメンタルでってわけには
いかないだろうから、

アキラは出演のドタキャンを決めるに違いない。

となると、30分あいちやうから、あの長髪をオールバックにして
後ろで結んだイベンターのお兄さんはむくれるに違いない。

「ではここで30分間の休憩とします。しばしご歓談ください」っ
てわけにもいかないだろうし。

当日だから出演料は全額こっちもちだな。それは私がテレアポのシ
フト増やして支払うしかないな。

あけみの口からは思わずため息が出た。

しかも、それとは別にアキラたちには牛角で焼き肉おごるくらいし
ないと……。

わあ、大出費……。

考えれば考えるほどどんどん暗くなっていく。

気がつけばあけみの出番まではあと9分。

もう無理。もういい。もう知らない！

とその時、助手席で外のほうを向いて眠っていた鉄が寝返りをうつ

た。

鉄の頭はあけみの肩に触れそうな位置に。

すやすやと気持ちよさそうに眠っている鉄。

ほんとにさあ、誰のせいだと思ってるのよー！とあけみは鉄を軽く睨んでみた。

「イーっだ！」と声に出して言ってみる。

無反応。

「もう、あんたが電話さえして来なきゃ、ライブに出られたのに！」

「だいたいなんで腰の寒春なんて飲むのよー」

「私、本当に怒ってるんだからね！」

いくらあけみが怒鳴っても、鉄は目を覚まさない。

あけみは怒っていた。でも、不思議と鉄を憎む気にはならない。

ああ、怒るのと憎むのって違うことなんだ。と気づいた。

どんなに怒っていたって、鉄を憎んだり、嫌いになったりするわけじゃないんだ。

だってほんとにきれいな顔してるしね。

あけみはしみじみと眠っている鉄の顔を眺める。

最近のはやりじゃないかもしれないがききりつとあがった太めの肩切れ長の目。

すーっとおった鼻筋。

面食いのあけみにはもうたまらない。

あけみは母親にいつも怒られる。

「男は顔じゃないよ。顔なんてついてりゃいいの。じゃがいもでもかぼちゃでも、ついてさえいいの！」って。

わかつちやいるけど、でも、やっぱりじゃがいもじゃないほうがいいなあ。

あけみはもう一度ごっつい腕時計を見た。

出番まであと6分。もうどうやっても間に合わない。

そう覚悟を決めたら、鉄への怒りがなぜかだんだん愛おしさに変わって来た。

かわいさ余って憎さ100倍とは良く言うが、憎さ余ってかわいさ100倍なんてこともあるらしい。ま、怒ってはいるが本気で憎んではないけれど。

鉄の顔を眺めていたあけみは、吸い寄せられうように、思わず鉄のおでこに口づけをしていた。

チュって。軽いキッス。

鉄は全く無反応。本当によく眠っている。

今度は右のほっぺにチュってしてみる。無反応。

あけみはだんだん面白くなってきて、鼻の頭にもキスしてみた。

そしてまぶた。ついでに鉄の長い睫毛をちよつとだけ舐めてみる。しよっぱい。

それから思い切って唇にも軽いキッス。無反応。

悔しい。もう一度キッス。

うん？あれ？今ってちよつとだけ反応あった？

あけみは夢中になって、もう一度チュッ。

と、突然鉄の唇がはつきりと意志をもって、あけみの唇を包み込んだ。

あけみはびっくりして一瞬目を開けたけど、キスシーンだからまたあわてて閉じた。

鉄とのキス。柔らかいキス。甘いキス。唇が溶けていきそうな、身体中が溶けて液体になってどこかへ流れていってしまいそうなキス……。

ブブー！ブブー！

突然あちこちからうるさいクラクションの音が。

鉄がぱつと唇をあけみから離す。

せつかくの甘い甘いキスを邪魔されたあけみは、
ちよつとちよつと勘弁してよー と思いながら顔を上げてみると、
前の車がない！

その前にいた車も全然いない！
いつの間にか走り出したらしい。

一時呆然としたあけみだけど、そうだ！ライブ！行かなくちゃ！
溶けかけていた身体をしゃきつと立て直すと
キリッとした顔をつくってあけみはアクセルを踏んだ。

その一 ハードロックは辛くない？（8）

あけみはもう、どこをどうやって走ってきたのか覚えていない。

黄色の信号が赤に変わったのを見届けても構わず交差点に突っ込み、バックミラーなんてただの一度も見ないで、とにかく前だけをみて車を走らせた。

やっとの思いで駐車場に滑り込む。

あー、スコールライブハウスって、目の前が駐車場でほんとにラッキー！

あれから鉄はずっと起きていた。

あけみの運転をジェットコースターに乗ってる気分楽しんでいたみたい。

ずっとニコニコして車に乗ってた。

「あけちゃん、かつこよかったよ」と

ニコリ微笑む鉄。

あのね、私はボーカリストなの。かつこよくななきゃいけないのは今からなの。

と思ったあけみだが、

「サンキュー。」と微笑み返した。

「鉄はどうする？」

「うーん。俺まだ眠いし。ここで待ってる。」

確かにね、そのほうがあけみだってありがたい。下手にライブ見に来られてもね。

っていうか間に合ってるんだろうか。

車走り出したと同時にアキラにはもうすぐ着くと連絡はいれてある。でもそれからまた携帯の電源は切りっぱなしだったからようすはわからない。

出番はもう7分過ぎている。

でも、前のバンドが押してる可能性もあるし．．．。

あ、でもあのイベントー意外に時間きちんとしてるんだよなあ。

と思いつつ、あけみは黒いゴルフのドアをボタンと閉めると、

鉄をひとり助手席に残したまま、駐車場からライブハウスへと走った。

血相を変えてドアに突進する金髪ミニスカートのあけみを見て、
ドアの前でたむろしていたグループもあわてて道をあける。

受付にはいった瞬間に、中からの演奏が聞こえて来た。

ツードットカッドットタツツ．．．．．ツードットカッドット
タツツ．．．．．

あの印象的なドラムから始まって、

エアロスミスのWalk this wayのイントロのリフだ。
ダガダガッダガッダッダン．．．ダガダガッダガッダッダン．．．

くうー！アキラ、きょうもいいベース弾いてるなあ。

ずっと同じリフを弾いてる。

シャッターが開いてる間、ずっとこのリフを弾き続けるつもりなの
かも。

わ、ステージ登るの間に合いそうにない．．．！！

どうしよう???

とあけみが青くなっていると、小声で

「オフクロ！」とよぶ声がした。

「太郎．．．」

「はい、これ。」

太郎がそつと手渡してくれたのはワイヤレスマイク。

「え？」

「これ、あのオールバックの長髪のお兄さんが、もうすぐ来るお母

さんに渡してくれって。」

あのイベントのお兄ちゃんが．．．？　なんであいつ太郎が私の息子だって知ってるわけ？

と思ったが、あけみには今考えているひまはない。

アキラが演出を考えてくれたに違いない。なかなかやるじゃん！

ゴルドのマイマイクはミニスカートの尻のポケットにつっこんで、

あけみはワイヤレスマイクを握った。

重い二重ドアを開けて、中にはいる。

ドラムとリフの音がバーンと大きく聞こえてくる。

ステージを見ると、シャッターはほぼ全開まで上がりきっている。

あけみは人ごみを掻き分けて、前の方に出た。

メンバーの誰かが気がついてくれることを祈りながら手をあげてワイヤレスマイクを大きく回す。

けど、ステージにいるメンバー気づいてない．．．。更に必死に前に進んでいる途中で

前のほうであけみに気づいたイベントのお兄ちゃんがステージに合図を出しているのが見えた。

と、いきなりボーカルがはいる直前のキューになるギター音がはいった。

”XXXXXXXXXXXX”

客席のど真ん中であけみはいきなり歌い出した。

回りがワツとどよめく。

あけみは気にせずそのまま客席の真ん中を通ってステージにかけあがる。

口笛を鳴らす男、手を叩くおじさん、客席はいきなり盛り上がりを見せた。

ステージの上でアキラとアツキヨにめくばせするあけみ。

全員がほっとした表情だ。

あけみは思い切り高いテンションで歌い続ける。汗が飛ぶ。

一曲終わったところであけみは叫んだ。

「Welcome everyone! 今宵限りのユニット、

ローリングスミスのライブへようこそ!」

客席からの拍手と口笛を聞きながら、あけみは思い切り恍惚の一瞬を迎えていた。

その一 ハードロックは辛くない？（９）

お客さんはノリノリのまま３０分のステージはあつと言う間に終わろうとしていた。

最前列で身体を動かしてくれてる子たちが見えるとあけみのテンションはあがる。

ちよつと離れてばーつと見ていられるのが一番辛い。

今日は、いい感じ。

最後の曲。エアロスミスのSweet Emotionだ。

シャウトたつぷりに歌い上げるあけみ。

とにかくもう玉の汗で、身体中が熱い。

最後のドラムがバシつと決まって、一瞬静かになったとき

あけみが汗と興奮でクラクラしながら

「Thank you!」と叫んだその瞬間、客席から

「あけちゃん、かつこいいー！４０歳には見えないよー！」

と、まぎれもない鉄の声。

瞬間的に汗がさーつとひくあけみ。

鉄、あの馬鹿。私の年齢は企業秘密だつて言つてあるのに！

客席も、笑つとこなのかなのかかわからずに、妙な空気のまま固まっている。

なんであいつここにいるわけ？車で待つてるつて言つてたのに！

シャッターが降り始める。

このまま妙な空気で終わるわけにはいかない。

「Thank you! ４０になつても、５０になつても、１００歳になつてもシャウトし続けるんで、よろしく＼Yeah!」と叫ぶあけみに、客席から暖かい拍手が戻ってきた。

客席に手を振るうちに、シャッターがガチャーンと閉まった。

ふう。なんとか助かった……。
一気に力が抜けて、膝がぐくぐくした。

「お疲れさまでした。」

アキラがあけみの肩をポンッと叩いた。

「迷惑かけてほんとごめんなさい！」

あけみは頭を下げた。

「いいステージだったから関係ないっすよ。」

意外にやさしい。

アツキヨもステージに満足したのかにこにこしている。

「でも、次はこういうのはごめんですよ。」と

アキラは柔らかく釘をさす。

あけみだってもちろん二度とごめんだ。

ステージを降りたあけみは、

鉄を捕獲するため、受付のところに行ってみた。

さすが地元での活動歴長いから、お客さんには知ってる顔も多い。

「よかったよ」とか

「すてきでした！」とか

声をかけてくれる若者たちがいるとちょっといい気分。

でも鉄は見当たらない。

「あけ〜。きょうはテンション高かったね！」

親友ののりこが顔をだした。

あけみが今回ひとりだけ集客したのが彼女。

幼稚園から一緒に、いまでも毎日のように連絡をとっている。

「オープニングの演出よかったじゃん。あけみが考えたの？」と言
われて

「あ、うーん。私じゃないけど……」と口ごもるあけみ。

「ねえ、あの最後に叫んだ男、あけみの新しい彼氏でしょ。すぐわ

かったもん。あけみのタイプだよな。」

「のりこにはなんでもバレバレか」。あいつどこに行ったか知らない？」

「シャッターがおりると同時くらいにすーっと出て行ったよ。」

出て行ったんだ。じゃあ車で待ってる気かな。でも太郎がいるし．．．とあけみが考えていると

入り口にいた太郎がすーっと寄って来て

「のりこさんこんばんは。オフクロ、俺先帰るわ。」

「ひとりで？」

「だってオフクロあの酔っぱらい送って帰んなきゃなんないんですよ。」

さすが息子。よくわかっていらつしやる。

「うん．．．」立ち去ろうとする太郎に

「あ、今日のステージどうだった？」と聞いてみるあけみ。

「良かったんじゃない。テンション高かったし。けど、疲れたんじゃないの。なんか今ボロボロに見えるよ。じゃあ。」

と太郎は足早に立ち去った。

ひえ！ボロボロに見えるって？息子だから言える事実かも。

「私、やばい？」とのりこにきいてみる。

「うん。言えなかったけど軽くやばいかな．．．」と苦笑いするのりこ。

あけみはのりこをその場に残してあわてて洗面所に駆け込んだ。

うわ。ほんとにひどい顔。

まぎれもなく40歳。いや、下手すりや45くらいに見える。メイクはほとんどおちてるし、疲れのせいかほほは落ちてるし、瞼も下がってるし、汗のかきすぎで脱水状態なのか顔色も悪い。

年齢は嘘をつかない。普段はごまかせても、この状況じゃどうしようもない。あーあ。

なんとか厚塗りしてメイクを直して洗面所から出たらのりこはもういなかった。

楽器を片付け終えてアキラたちが楽屋から出て来た。

「あけさん、いっぱいいきますか？」

「あ、ごめん。私今日ちょっと……。」

「そうですか。じゃ。」

とあっさり言われた。ちょっと悲しい。でもあけみは鉄をほっとけない。

そうだ、お世話になったイベントーのお兄ちゃんに挨拶だけしようとあけみはお兄ちゃんを探しにステージのほうへ戻った。

お兄ちゃんはまだステージでコードを丸めている。

「あ、きょうはどうもありがとうございました。」
と声をかける。

お兄ちゃんはちよつと目を細めてあけみを見ると

「太郎君によろしく。」

「太郎のこと知ってるんですか？」

「バイト先の後輩ですから。」

あ、そうなんだ。

「あけみさんとの関係も太郎君から聞いてたんで。オープニングうまくいってよかったすね。」

オールバックのお兄ちゃんにこつと笑った。

なんだ笑うと結構かわいいいじゃん。普段なんかちよつとまじめくさって怖い感じだけど。

あけみもにっこり

「またよろしくお願いします。」

あけみが外に出るともう誰もたむろしてはいなかった。

もう夜遅いしね。

ひとりで駐車場に向かう。ちよつと寂しい。

鉄はまた眠ってるかなあと思いながら車をとめた場所に……

ない。車がない。

あいつ、まだ酔っぱらってたのに、あのまま運転してっちゃったんだ。

あぶないじゃん．．事故ったらどうするのよ．．．

っていうか、もう疲れた．．．面倒見きれない．．．

なんだか一日の疲れが一気に出て、
そして、どっと悲しくなって、

あけみはその場にしゃがみこんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3839b/>

歌姫は40歳

2010年10月11日15時32分発行